三度の飯を二度にする人の氣がしれぬ

何のために働くか

できなくとも・いつでも世の中のためになることをやつてゐる。つまり仕事をするのは己の精神にあるのだから、よい心掛けの人はいつてもよい事をやつてゐるし、心掛けのよくない者は何うしたとてよい事のできるはづはない。つまり金を拵へてからよい仕事をするといふ人は、我儘勝手な薄情な事をするのを良心がとがめるものだから、世間體を飾るために金を儲けてからなどといふてゐるのである。更にヒドイのになると喰ふものも喰はずに金をためるといふ人がある。三度喰べるところを二度にする。三杯喰べるところを二杯にする。自分ばかりでなく家族の者の口をつめ奉公人の口までつめる。何んのために喰べるものもたべないで金をためるのだか分らない。人間はたべるものを喰べるために働い

て金を得るのである。いふまでもなく金を食物にかへ金を着物にかへて、空腹を滿たし寒さを暖かくするのであつて、金その物では腹がくちくもならないし暖かに着ることもできない。目的は喰べて着てそして世の中のために仕事をすることである。それを喰ふものも食はずに金をためるなどいふのは、馬鹿馬鹿しくてならないが、かういふ人が世の中に少くないのだから驚かざるを得ない。こんなふうに、

自分の始末もできないのに他人のためになることをしやうとする者

金を儲けてから世の中の益になることをしやうなどと僞りを

いふ人

恐るべき迷信の害

食ふものも食はずに金をためて自分も苦み、他人までも苦しませる

といふ人ができるのは、何に原因するかといふと、詮じつめると誤まつた信仰が盛んになつてゐて、正しい信仰が行はれてゐない結果である。つまり先に説明したところの心の迷ひから、かういふ氣の毒な狀態をみるのである。

正信につけば何ういふ事になるか

それでは正しい信仰についたなら、何ういふことになるかといふと、心の迷ひが、すつかりと取除かれて明るい心になり、自分自身の狀態を自分自身で明らかに見ることができる。そういふ明らかな心になると、自分で自分の始末がつかないなどといふことはなくなり、從つて他人の面倒までもみる事ができるやうになる。

一から十までためになる

金を儲けてから世の中のためになる仕事をするなどといふやうなことはいはない。朝起きるから、顏を洗ふのから、眠りにつくまで、一から十までためになる事をすることができるやうになる。ましてや職業とするところのものが、立派なよい仕事をすることはいふまでもない。この起きるから寢るまでがためになるやうな行ひのできない人であつたなら、世の中のためになる仕事をするなどといふことは嘘の皮である。そしてかういふやうに本當によい行ひのできる人であつたなら、喰べるものも喰べないで稼ぐなどといふ馬鹿々々しい人をみると、可愛相だ、何んとかして精神を改造してやらうといふやうなことになるのである。

そこで以上の話しを區別すると、よいことのできる人と、よい

善事できる人の狀態

善事のできる人は病ひにかかる

ことのできない人との二種になるが、その結果は何ういふことになるかといふと、よいことのできる方の人は、身體もますます健全になりニコニコと元氣てくらせるやうになるし、よいことのできない方の人は、精神の病ひから肉體の病ひとなつて、遂に病院通ひをせねばならぬこととなるのであるが、先きに説明した通りいくら病院に通つたとて、精神が改造されない以上は健全な人になることができないのであるから、何うしてもかうしても精神の迷ひを取去つて正しい心になり、そして眞の健全な人となつて立派なよい仕事ができるやうになつて貰ひたい。

以上の説明によつて、藥ばかりでは病ひは治らないことがお分りになつた事と思ふ。そこで醫者が病人を診察するには、病氣ば

診察はかういふやうにせよ

靈の醫者

かりでなく、病氣の起つた原因をも診察して、藥以外に藥以上のものを病者に與へてやることが、醫者として重大な任務であり、病人も早く病ひが治るのである。つまり肉體の先生でなく精神の先生になることが肝要なのである。例へば仕事の失敗から氣落ちをして病ひになつたとすれば、病人の氣落ちがした精神を引立たせて、元氣のある心にしてやるのが一番大切であるし、我儘が通らないて病ひになつたとすれば、我儘のなほるやう理解を聞かせてやるといふやうに、單に藥だけの醫者でなく、靈的の醫者になつて貰ひたいと思ふのである。假りに、肺病は不治の病ひであるといふ事を病者が信じてゐて肺病にかかつたとすれば、己はモウ駄目だといふ氣になつて、本當に駄目になつてしまふやうなもの

病ひと精神の働き

で、病氣には、精神の働き、頭の働きと密接の關係があるのであるから、靈的の醫者となつて、藥以外に心の働き頭の働きを治してやるといふ事が、非常に大切なことである。

昔の醫者今日の醫者

昔しの醫者には、この靈的の醫者が多かつたが、今日ではだんだん靈的の醫者が少くなつたやうに思ふ。それは今日てもちよつと位ゐは精神の持ち方が大切であるといふ事が醫者に分つてゐるらしいが、いくら分つてゐても實際に當つて病者の精神を治してやらうと思つても、なかなか病人の心が醫者には自由にならないのである。心配のある病人に向つてあなたは心配するのがわるい心を安らかにお持ちなさい位ゐなことをいふたからとて、醫者のいふ通り、はあそうですか、それてはやめませうといふて、心配

醫者の精神

をやめるといふことにはならないのである。そこてそういふことをやつても効果はないし、反つて病家の氣嫌でも損じてはいけないと思つて、知つてゐても全然そういふことを口にせぬ醫者も中にはあると思ふ。こんなふうに今日の醫師は藥ばかりの醫者が多くなつて、靈的の醫者がないといふのは何に原因するかといふと醫者の精神の持ち方が違つてゐる結果てあるやうに思ふ。何ふ違ふかといふと、醫者にならうと思ふそもそもの始まりの心が、何うかして世間の困つてゐる病人を治してやらうといふのではなくて、醫者になれば收入も多いとか、世間體がよいとか、よい風采ができるとか、先生先生と奉られてゐられるとかいふやうな考へてあり、一人前の醫者になつてからも、代診や看護婦も大勢使ふ

物質本位

やうになりたいとか、病院を立派にしたいとか、金を澤山儲けたいといふやうな考へをもつてゐるらしい。斯ういふふうに、すべてが物質本位になつて、精神的の靈といふ方面には縁が遠くなつてしまつてゐる。醫者の心が物質本位になつてゐるから、病人に對しても物質本位になつて、藥さへ與へればよいといふ藥專門の醫者になるわけなのである。そこで今日では病ひと藥品に關する智識は非常に進んできてゐるのであるが、精神療法といふ方面からはだんだんに遠ざかつてしまつたのである。そのために藥や器械が立派なものができても、肝心の病ひを治すといふことは思ふやうにならないといふ結果になつてゐるのである。これは醫師が藥を道具に使つて病ひを治すべきものであるのを、醫師が藥品の

忘れられた精神療法

醫師が藥に使はれてゐる

醫師への希望

道具に使はれてゐるといふかたちになつてきたのである。かういふ風に藥專門、金儲け專門の物質本位の醫者が、精神療法といふ方面から遠ざかるといふことも當然の事であるし、また精神療法をやらうと思つて病者にお說教をしたところで、病人の方でも醫者のいふ通りにはならないのは分りきつた事である。

精神療法といふ事については、今の醫者は智識が薄いやうであるが、その効果は實に偉大なものなのでありますから、醫師諸君は是非此方面に頭を向けて頂きたいと思ふ。なぜといひますと、前にも說明した通り病ひといふものは、心の迷ひ即ち雜念が一つの惡靈となつて、病魔といふものになるのでありますから、病ひと惡靈とは切離すことのできない、くつつきあつたものなのてあ

藥品と惡靈との戰ひ

りますから、藥を與へて病ひを治すといふことは、藥品と惡靈とが戰鬪をするといふことになるのである。今一層分りやすくいひますと、醫者と惡靈との爭ひであるといふ事になるのであります これだけ説明すればお醫者さんも、精神といふことは病者に深い關係があつて容易ならぬ問題であるといふことがお分りになりましたでせう。

同じ藥でも醫者によつて効能に差がある

そこで同じ藥でもそれを與へる醫者によつて、効果が同じではないといふわけもお分りになる事と思ひます。早い話しが御飯を喰べるにしても、自分の惚れてゐる別嬪さんがニコニコ顏でお給仕をしてくれるのと、自分の嫌ひなお婆さんが、皺だらけの手でお給仕をしてくれるのとでは、同じ御飯でも一方はうまく喰べら

醫者と精神修養の必要

れ、一方はうまくは喰べられないといふことになつて、同じ味ひに感ずべきものも味ひが違つてゐるものの如く感じるのである。これと同じわけで、信頼のできる醫者がもつてくれた藥と、危ぶまれる醫者のもつてくれた藥とでは、同じ藥であつても効能の現れ方は大へんに違つてくるのである。そこでお醫者としては、信頼のできるお醫者になる事が何よりも一番大切なことなのであつて、この信頼のできる醫者になるには、物質本位でなく精神の修養をすることが大切であるといふことになるのである。

それを今日の醫者は、藥だ、器械だといふて物の方面ばかりに頭を使つてゐるからとんでもない事になつてしまふのである。診察室だ器械だ病室だといふて設備に大層な金をかけても、果して

費用をかけただけの收益があればよいが、若しも收支償はないことになるとよくない考へも起つて、遂ひには新聞の三面記事を賑はすといふやうなことになるのである。つい此頃も、醫者が生命保險にかけた女を藥品で殺して保險金を詐取したといふやうな事が新聞にでてゐたが、隨分怖ろしい話である。

近頃靜座法だとか、自彊術だとか、腹式呼吸だとか、さまざまな健康法が行はれてゐるが、これは醫者の藥を服んでもなかなか病ひが治らないために、何か良法はあるまいかといふところからいろいろの健康法が盛んになつてゐるのであつて、この種類に屬してゐるもののうちには人の弱點をつけ込んで、山師的の連中が隨分いかがはしい方法をやつて金儲けをしてゐるのもある。お加

靜座法などの盛んになつたわけ

持をたのむとか、祈禱をたのむとか、お呪ひをするとか、お札をうけてくるといふのもやはりこの類であるが、いろいろの方法はあつても藥品にせよ、精神療法にせよ、その他の方法にせよ、さてこの法ならば十人が十人とも如何なる病ひでも確實に治ると請合ふことの出來るものは一つもないことは、實驗した人達が證據立ててゐる。

尤も藥品で病ひが治ることもある、病ひが深くならないで淺いうちならば、藥品を服用しただけで病ひは治るのであるが、病ひが深くなつてくるとなかなか治らない。それは前に說明したところの惡靈が盛んになつてゐるためである。惡靈の盛んであるといふのは、邪念のために、いろいろの惡い緣因を作つてきた結果、

囁ふべき迷信

確實に信ずべき良法なきか

藥品で病ひの治る場合

惡靈の盛んなわけ

精神療法でも効果なき理由

人間の身體に惡靈が盛んなために、それが病ひとなつて出てゐるのであるから、單に藥品を服用するとか、世間で行はれてゐるところの精神療法などをやつても好果をみることができないのである。そして邪念の多い人はますます邪念を深くしてゆくといふ狀態になつてゐるのである。つまり邪念の多い人は病ひにかかつても自分の精神が惡いといふことに氣がつかないで、病氣になつたそれ醫者だ、また惡くなつたまた藥だといふやうに、醫者任せ藥任せにして、自分といふことに氣がつかないから肝心の病ひの原因といふものが治らないばかりでなく、服んだ藥が害をして藥をのむごとにだんだんと身體が惡化してしまひ、また精神の方も我儘や不平といふやうな邪念がますます增長してゆくといふやうな

あまりに藥にたよりすぎた

藥が害をする

慢性

藥品のために身體害ふた實例

ことになるのである。醫者が慢性になつてゐるといふのは、かういふ部類に屬してゐる人をいふので、かういふ風に邪念の多い、藥を澤山に服んだ人は、なかなかお醫者の思ふやうに病ひが治らないのである。

つまり邪念が淺ければ藥だけでも身體に受付けるけれども、邪念が澤山にある人は藥だけでは受付けないのである。藥よりも惡靈の方が强いのである。かういふところに氣が付かないで、醫者はじめ病人に至るまでがみんな藥のみを信賴してゐるために、その結果多數の人が氣の毒な狀態をみてゐるのである。

私の友人で牛込若松町電車停留場前に藥劑師で藥種店を開いてゐた人があつたが、この人は自分の手許に澤山の藥もあるので

薬品で害ふた身體は全快はいむづかし

病ひにかかるごとに薬のあるに任せて服んでゐた、薬品の智識のあるところから隨分高價な良い薬も用ひたそうであるが、風をひいたそれ薬、胃の消化が惡いまた薬といふやうにやつてゐたところ、澤山薬を服んだのだから身體がよくなりそうなものであるのに、だんだんと身體が弱くなつてきたものだから、終には毎日のやうに朝も薬、晝も薬、晩も薬といふやうにのべつに薬と親むやうになつた、ところが何うしたものか終には薬を服んでも薬の効能がなくなつてしまつた、腹痛を止める薬を服んでも腹痛が止まらないといふことになつたので、やうやうやつと薬品萬能の弊害が分つたそうである。そこで何うにかして元の壯健な身體になりたいと思つて、お定まりの通り靜座の先生の所へ通ふことになつ

たのであつた。ところが暫く靜座をやつてゐるうちに靜座の先生が首をかしげて、何うも君の身體は薬をあまりに服んだものだから、その薬が害をしてゐるために靜座をやつても効がないといふのである。健康を害しても薬を澤山に服まない人は治りやすいが薬を澤山に服んだ人は薬のために身體を害ねるために靜座をやつても効果があがらないといふのである。これをもつてみても薬品が變じて身體の毒となるといふことは明かなことである。

薬劑師で氣の毒な狀態にある友人がもう一人ある。東京府下大久保に住つてゐる人であるが、この人は東京帝國大學附屬醫科大學の薬局に出てゐた人で模範薬劑師であるが、薬劑については明るいだけに科學萬能の人で、病ひなら薬といふ方の人であるが、

神經衰弱は重病也

ひどい神經衰弱に陷つてゐるのでまことに氣の毒に思つてゐる次第であります。神經衰弱といふ病ひは世間の人は輕くみてゐるけれどもこれは最も重病なのである。他の病ひは身體のある部分の病ひであるが、神經衰弱ばかりは惡靈のために頭の先きから足のさきまで、全身が惡くなつてしまつた病ひなので、これは容易ならぬ病ひなのである。それだから神經衰弱にかかると藥などでは到底治らないのである。

病ひの深い人、即ち惡靈の多い人は藥のみでは治らないといふことは、藥に力があつても惡靈のために打消されて反つて害になることがお分りになつた事と思ふ。そこで惡靈の多い人は何うしても健康體になることはできないものといふことになるわけてあ

眞の健康法はただ一つ

靈を以て靈を退治する

靈の力

るが、病ひの深い人でも治る方法がタツタ一つあるのである。それが眞の健康體になる法であり、最善最良の方法なのである。それは惡靈を退治るのであるから、良い靈で勝つに限るのである。つまり靈を亡ぼすのだから靈をもつてすればよいのである。病ひの種類は數々あるけれども、前にも再々説明した通り病ひの起る原因は一つしかないのであつて、すべての病ひは惡靈の作用した結果なのである。このやうに病ひの原因も一つであるから、治す方法も一つであり、靈のために病ひとなつたのであるから、靈の力で治すといふことになるのである。

併し靈の力を見ない人には、靈の力で病ひを治すといふやうなことが、果してできるものであらうかと疑ひを起すかも知れない

それは尤もな話しで、今日では世間に病人の多い如く邪念のある人が多くて、善い靈に支配された人をあまり見受けないから、こういふ疑問も起るのであるが、善い靈の働らきといふものは實に偉い力をもつてゐるのである。

靈の働き

善い靈が惡い靈を亡ぼすところの偉大な力は、それを實驗したことのない醫者方には夢のやうな話しに思はれるかも知らないが物事には正に對する邪、惡に對する善、正法に邪法といふやうに動かす事のできない眞理がある。それから割出して人をなやます靈があればそれを亡ぼす良い靈のあることも當然であるといふことを認めて、その方に進んで貰つて善い靈の醫者、天の使命を全うするところの眞の醫者となつて、世の中のために盡して貰ひた

眞の醫者となれ

不治の病ひを全治した

いと切望してゐる次第であります。今日では藥品も器械も、醫術の進歩したことは非常なものでまことに結構なことでありますが器械や藥品のみでは駄目なことは再々説明した通りですから、良い靈の力を認めて、靈の力を備へたうへに器械や藥品を用ふることにすれば、如何なる病魔でも退治できないといふことはないのでありますから、良い靈の醫者、眞の醫者となつて天命を全うせられるやうに重ねてお願ひ申しておく次第であります。

我が日本題目會員が信行によつて、不治の病ひを全治した例を二三掲げて、醫師並に疾病のためになやんでゐる人々のために、靈の力の偉大なものであることをお話し致しませう。第一番に本書の著者から、

著者の實驗談

實驗談（その一）

東京市牛込區早稲田大學前
日本青年社々長　宇野共次（三十五才）

私の父親が大酒飲みであつたためか、私は赤兒の時分から弱い身體であつた。幼い時分の事はよく記憶してゐないが、九才のときに父が大病のために私は埼玉縣大宮町のおぢのところに預けられた。大宮は川越町に近くてさつま芋の本場であつたので、お芋を澤山に喰べたところ、生來弱い身體であるうへに芋の大食をやつたのでスツカリ胃腸を痛めて、その後胃腸病は私の持病となつてしまつた。

それから、私は生れついて心臟が弱いのであつた、ちよつと坂

病ひは全身に及ぶ

を登ると息がきれるといふ有樣だつたので、馳けることなどは大の禁物であつた。その外身體の狀態にいろいろと惡いところのあつた事を列べると、足のすぢが急につれて夜眠られないやうなこともあつた。毎年夏になると脚氣病で苦しんだ、冬でも足のしびれることがあつた。神經衰弱のために自分の話してゐることすら何をいふてゐるやら分らないことがあつた位ゐにひどく惱んだ。この時分には、夜る寢床にはいつても眠りにつく迄にはいろいろと雜念で苦しんだ、やつと眠りについてとろとろとまどろむと目が醒めて、全身びつしよりと盜汗を出すのが常であつた。そういふときには目がさへてなかなか眠られなかつた、眠るとぢき目がさめ盜汗をかく、目がさへる、また眠り、また醒るといふやうに

病の間屋ともいふべき身體

一晩に五遍も六遍も目がさめた。朝起きるときから頭が重くて一日頭がボーッとしてゐた、一眠り眠つて目のさめたときは實に不快な感じがして、目がさめるときせいせいとして氣分よく起きるなどといふことはなかつた。それから肋膜もわるかつた、息をする度毎に腋の下へ針でもさされるやうにッーンッーンと痛んで、息を充分に吹ひ込むこともできない事があつた。その時には麹町で注射を專問にやつてゐた醫師に注射をやつて貰ふと一時よくなるのであつた。胃腸が惡い位ゐだから下痢は一ケ月のうちに何回もやつた。風邪も度々引いた、鼻カタルで鼻の穴の奥が腫れて、口でなければ呼吸のできないことがあつた。咽喉カタルにもかかつた、氣關支カタルにもかかつた、肺も惡くした、痔もあつた、

一家族悉く病弱

いかに努力しても病ひの深くなる煩悶

からやつて並べ立ててみると自分には全身ことごとく惡かつた事が分る。

父親は私が九才のとき死亡し、私の兄は十七才で死亡し、妹は十九才で死亡し、遂には母親と私とが殘つて、親一人子一人になつてしまつたので、私は一層心細くなつて私の身體に若しものことがあつた日には、母親は路頭に迷はねばならぬこととなるので私は何うしても丈夫にならなければならぬ身體であつたから、藥は、この藥あの藥といふていろいろと服用した、醫者にもこちらの醫者あちらの醫者と隨分手を煩はした。食養法から、いろいろの健康法などもやつてみたが、更にその効なく風を引くとか腹下しなどをやるごとにだんだん身體はわるくなる一方であつた。私

醫師の躁言

の家の隣りに三上某といふ醫師がゐた、この醫師は私の身體を八九才の頃から診た事があるので私の身體の狀態はよく知つてゐたので、いろいろと養生法などを敎へてくれて力をつけてくれたが私が十九才の頃のことであつたがその醫師がいふのには、君は養生をよく守れば三十歳位ゐまでは生きられるであらうといふことを話された。この話しを聞いただけで私の身體がその當時いかにひどい身體であつたかがよく分りませう。醫者の方で三十歳と口に出して話しをするくらゐだから、實際にみるところではモウ二三年で駄目とみた事と私には想像される。それは醫師にいはれるまでもなく、私にもこれては駄目だと思つてゐたのであつた。

母の慈愛

私の母は私よりももつと眞劍に私の身體を心配した。親が子供

迷つた信仰では神佛の救ひなし

の身の上を思ふてくれる慈愛心が深いからである。母親は貧乏ひまなしの忙しい中をあすこの神樣、ここの佛樣と參詣をするやらお札を貰つてくるやら、護符だとかお水だとかお加持を賴むとか御祈禱をたのむとか一生懸命に神佛を祈つたが、神樣も佛樣も取あげて下さらなかつたとみへて少しも靈顯がなかつた。

始めて佛の敎へを知る

それでも私は母の事を思ふと何うしても、死ぬにも死なれなかつたので、靜坐の先生のところへ通つてしきりに靜坐などをやつてゐたところ、そのとき正運師に遇ふて、信行の話しを聞くことができて始めて正しい信仰といふものが分つたので、それから母にも話しをして、今迄まつつてあつた迷信の佛樣や神樣の木像繪像お札の類を悉く燒きすてて、迷信をすて正信につき毎日旬晩修

迷信の神佛を燒きすてる

薬品を用ゐずして諸病を全治す

信仰後の大ニコニコ

行したおかげで、信行の道にはいつてからは薬も服まないのに、前にお話しをしたやうないろいろさまざまの病ひをもつてゐる私が、スツカリと丈夫になつてしまつたばかりでなく、心の邪念が取除かれたために以前にはみることのできなかつたはればれとしたよい氣分になり、いろいろと神經を惱ました忘想もどこへ往つてしまつたことやら、きれいさつぱりとなつて、嫁も貰ひ、子供も出來て丈夫にそだち、一家のこらずが信行のおかげでニコニコして暮らすやうになり、營業も少しは世間に認められるまでに盛大になつたのであります。以前にはいくら薬を用ゐても治らなかつた私の身體が、今日では薬一服のまず醫者の手を煩はさずに、人間らしい丈夫な身體になつて、山登りなどをしても壯者をしの

ぐ身體の持有者となつたのは、信行の力、即ち靈の力に外ならないのである。この靈の力を認めることのできた私は、その後病氣のために苦しむ多くの社員や、私の親しくしてゐる人達を信行の道に入れしめて、それ等の人々を健全な人にならしめる事ができましたので、茲に本當の打あけ話しを致しました次第ですが、本書を著したのも信仰の力の容易ならぬことを世間の人々に知らしめて、不幸の人々を幸福の道に導きたいといふ望みからなのであります。

實驗談（その二）

東京市牛込區早稲田鶴巻町四七一

洋服商　日置敬太郎（三十七才）

醫者にも分らぬ病氣

私の病ひについては醫者が頭をかしげて不思議に思つた位ゐで多くの醫者に診て貰ひましたが何うしても治すことのできなかつた痼疾を、信行の道にはいつてから僅々一ヶ月とは經たないうちに、藥一服のまないで全治してしまつた。不思議な靈の力についてお話しを致し度う存じます。

私の鄉里は富山縣でありまして、十六歳のときに上京したのですが、東京で暮らすやうになつてから一年ほど經つと脚氣病にかかりました。かつけを患ふやうになつてから何うしたものか、一ヶ月のうちに十回位しか通じがないので、何となく氣分がはつきりしないで困りました。藥もいろいろと服んでみましたが、だんだんと脚氣もわるくなり、脚氣病がわるくなるに從つて通じ

通じがない

醫者に嗤はれる

の方も回數が少くなつてきました。霞町に住つてゐたとき兵隊にでましたが、軍隊にゐるときは脚氣病もでませんでしたけれど、通じの方はやつぱりうまくゆかないで、一ヶ月に漸く五六回しかありませんでしたので軍醫にも話しをして、診ては貰ひましたけれど軍醫にも通じのない原因がよく分らないとみへて、本氣にはならないでひやかされてしまふので、いくら話しをしても駄目だと思つてその後はだまつてゐましたが、演習にでたときなどは便の通じがないために反つて都合のよいやうな場合もありました。除隊後も通じのないことは續きましたが、もう通じの少いことが習慣になつてゐましたので割合に平氣ではゐましたけれど通じのない結果は後頭部が固くなつて、頭がヅキンヅキン痛みまして、

何となく、不愉快なので非常に困りました。いつも通じさへあれば気持がよくなるので、何とかして通じが順調になるやうにと思つて、上野にゐた頃は針醫のところにも通つて療治して貰ひましたが、針醫のいふのには、通じがないと頭へのぼるので、工合わるくなるのであるといふて講釋をしてくれましたが、病ひの方は以前として治りませんでした。その後乃木坂の方へ移轉してからといふものは、通じがなくなつてしまつたまま幾日經つても通じといふものが更になくなつてしまひましたので、水やリスリンて灌腸をして通じをつけました。それからといふものは灌腸て通じをつけることが例になつてしまひましたが、併しそれも當座のうちは、灌腸をしたときに通じがつきましたけれども、終ひ

醫師の診療も効なし

には灌腸をしても通じが思ふ樣につかなくなつてしまひました。こんなふうで非常に苦しみましたので、馬鹿馬鹿しいやうですが墨判斷までやつて貰ひましたが、墨判斷の先生が判斷をつけていふのには、下がわるいから上(頭)にのぼるのである。などと尤もらしく講釋してくれましたけれども、肝心の通じをつけるといふことについては依然として何うすることもできませんでした。いふまでもなく、それまでには何回となく醫師の診療を受けたのでありましたが、何うしても全快することができなかつたのでありました。

我國では有名な東京醫科大學附屬の大學病院にも通ひましたけれども、診察をうけて藥をのんでみますと、初まりのうちは藥を

薬品も効なさず

のんだときに通じがありましたけれども、後ちには薬を服んでも効きめがなくなつてしまひましたので、醫學博士の入澤達吉先生に話をして診察をうけましたけれど、いろいろと診察をした結果何うもよく分らないから入院してみたら何うかと言はれましたが入院するだけの暇がなかつたので入院だけはしませんでした。それから永樂病院でもみて貰つた事がありますし、赤羽橋の濟生病院でもみて貰つた事がありますが、何うしても藥品の力では私の病ひが治りませんでした。私の身體は外面から見たところでは壯健の人と少しも變りがありませんから、だまつて診察をうけると醫師はどこもわるくないといふのです。かういふ譯だといふて話しをすれば、フームそうかといふて再び診察をしなほすやうな譯

外形は立派な健康體

醫藥効なく信仰に心ざす

日蓮上人の教へにそむく

てすが、それでも、君の身體には何處にも異狀がないといふのです。自分がこれほどに苦しんでゐる病ひがあるのに、何處もわるくないといふのは何うしたわけかと、實際腹立たしくなつて癇癪を起したい位ゐでありましたが、それでも何うにかして、病ひを直したいと思ひまして、毎朝毎朝夜のあけないうちに雜司ヶ谷の鬼子母神樣へお參りをして、お賽錢をあげてはお願ひをしておりました次第です。するとお隣家に飯沼四郎さんといふ日本題目會員のお方がおゐでになりまして、その方がお話し下さるのに、鬼子母神へ參詣するなどといふことは良いやうだが實際は宜しくない。それは日蓮上人の教へにそむいてゐることだから、何程參詣したとて御利益などあるべき筈がない。いはゆる迷信といふもの

だからおよしなさい。日本題目會では日蓮上人の敎へに叶ふたところの信行をやつてゐますので、御利生が實にあらたかです。自分自分も結構な御利生を頂いてゐる次第ですから、あなたも是非正しい信心をおやりなさいといはれましたので、半ばは信じ半ばは疑はしいやうにも思ひましたが、飯沼さんの御紹介で日本題目會員になり信行を實行致しましたところ、數十年の間醫藥の力では何うしても治らなかつた病ひが、不思議にも信行を始めてから一週間ばかり經ちますと靈驗が現れて、通じの方も三日目に一回二日目に一回、毎日一回づつといふやうに、僅か一ヶ月ほどのうちに毎日一回づつちやんと通じがつくやうになりましたので、本當に有難いと思ひました。

數十年の病疾治る

信行の道にはいつた心持の好さ

東京へきたその翌年から、五分間ほども座つてゐてから立ち上ると、かつけのためにストーンと倒れて自分ながらビックリするやうなこともありましたが、信行をしたおかげで毎日一回づつ通じがあるやうになつてからは、かつけは申すまでもなくすつかり治つてしまひましたし、以前は氣分わるく暮してゐたのが、今ではセイセイとしたよい氣持になつて、仕事をしても面白くてき、元氣でくらせるやうになりました。小僧に對しても癪にさわつてしやうがないために、始終しかりとばしたりしてゐましたのが、今では冗談などをいひ〳〵面白くやるやうになりました。此頃では商賣が忙しいために隨分夜遲くまでも仕事をやりますが、少しも苦痛を感じないやうになりました。それから小僧達も、私がゐ

ないときには怠けてかげひなたをして困りましたが、今日ではそういふわるい癖が少しもなくなつて、私のゐるときでもゐないときでも同じであるやうになつたのも信行のおかげさまなので、毎日毎日喜んでくらしてゐます。

不平屋の張本

實驗談（その三）

東京府豐多摩郡戸塚町下戸五二塚畑廣吉方

事務員　大島俊平（四十歳）

私の生國は淡路です。おぢいさんは明治維新のとき町人になつて、大島屋といふ屋號で提灯屋を始めたのです。おぢいさんは非常に理窟つぽいので、町内で理窟屋といふ評判を取り、都々逸にまでも仕組まれて歌はれた程の理窟屋でありました。おぢいさん

新聞記事と喧嘩

天下の事みな不平

自殺を計る

が理窟屋であつたせいか、私も十五六歳の頃から心が修まらないで理窟屋となり、人の顔さへ見ればスグ理窟をこねるといふふうでした。その位ねですから新聞を見てさへも理窟がいひたくなつて、政治に關する記事に對しても三面記事の出來事でも何一つとして不平のたねになり理窟のたねにならぬものはありませんでした。そんなわけで天下の事悉く不平といふ有樣でしたから、こんな世の中に生きてゐてもつまらないと思つて、いつそのこと死んでしまはふと自殺を計つたことも二度や三度ではありませんでしたけれど、また一面には自殺は卑怯なものだ、男子のなすべき事ではないといふ意志も持つてゐたので、生きてゐるのも厭い、死ぬこともできぬといふので非常に煩悶した結果、外國にても行

信行の靈効なみる

つたなら心の惱みから逃れることができるであらうと思つて、外國行を決心して渡航を企てたことも度々ありました。

不平の結果から親戚の者とは五六年間も音信不通ハガキ一本出さないこともあつたために、身内の者の死も知らずに過ごしてゐたといふ不孝もしたくらゐで、その當時は全く世をうらみ身をうらむといふふうでした。それに十八九歳の頃から脚氣病が出て、毎年夏になると三ケ月間といふものは全然身體が使ひものにならなかつたために、例年の如く歸國をしてゐましたが、しまひにはそうそう國へ歸るといふのも事情が許しませんし、國の者も喜んで迎へてくれぬといふふうでしたので、その時分にはつくづく死んでしまつた方がましだと考へてゐましたが、幸ひに正しい信行

につきましてからはかつけも全然治つてしまひましたし、死んでしまはうとまでも思はせた、不平や煩悶の心もだんだんに消滅してしまつて、今日ではその日その日を面白く愉快にくらしております。今から昔しの事を思ひかへしてみますと、ぞつとするほど實に夢のやうに思はれますが、今日からして風邪一つ引かないでニコニコとして暮せるやうになりましたのも全く信行のおかげさまなので、實に有難い事と思ひまして毎日毎晩信行をしておりますやうな次第でございます。

本書を讀んだ讀者の心持

十一　一切を解決する心の改造

さて、今まで說いてきましたことによつて、讀んだお方のお心持ちを察してみますと、あまり明らさまによいことわるいことを忌憚なく述べましたので、よみながら顏をしかめるやうなことも御座いましたでせうが、どなたにしましても一生懸命に努力をして、立派な人間になりたいといふお心は、お腹の中に一ぱいにあるのだけれども、日常に事實となつて現れてゐるものは、自分の心に思つてゐる通りにはならないで、一心になつて働かうと思つてはゐても、怠けたい心も出てきて邪魔をされてしまふとか、折角よい仕事に取りかゝつても、とんでもない心がでてきて目的を

貫くことができないで困つてゐるとか、人によつて困つてゐる事柄は違つてゐましても、だれかれといふことなしに何物かのために思ふやうにならないで困つてゐる。その困つてゐるといふ原因も、本書をお讀みになつた皆さん方には、ははあ身體に靈魔！言葉をかへていふと邪念があるために己の本性を充分に發揮して活動できるところの立派な人間になり得ないのであるのだ。邪念即ち迷ひさへ取除けば明らかな心となり、本性をあらはして精一ぱいの働きができて愉快な生活ができるのであるのだ。己の幸福をさまたげてゐるところの靈魔を取去る方法は日本題目會で知つてゐて、それを實地に行つて多くの會員が結構な狀態になつてゐるそうだ、といふところまではどなたにもお分りになつた事と思

讀者のとるべき道

ひます。

ここで本書を讀んだ人の考へによつて、とるべき考へがいろいろと異つてくる。理由は分つたが自分自身もその方法を實行してよい狀態になりたいといふ考へのてないものもあらうし。どんな方法だか一つやつてみやうかしらん位の人もあるでありませうが是非その法を實行して立派な人になりたいといふ方もあるであらうと思ひます。それは心のうちにもつてゐるところの因縁のよしあしによつて違つてくるのであります。

一層よくともうやけだ

少しお金でもできたり、名譽でもできたりした人であると、千年も萬年も生きたいといふやうな考へも起つてきて、結構な道をとりたいといふ人もあるが、わるい方の狀態にある人は、おれは

現世のみ知らぬ不幸人は生れかはつてもどこまでも因縁はつこまで

恐るべき前世の罪

もう迚もだめだ、今更となつてよいことをしたとて何になるものかといふやうな考へを起して、自暴自棄に陷つてしまふ人もあるが、これは現世のみを知つて、次の世を知らないためなので非常な大間違ひなのである。

現世で惡い因縁をつくつたものは、惡靈となつて殘つてゐて消へさるものでないから、次の世に生れかわつて出てきたときにはやはりそのわるい靈のために苦まなければならないのである。よく子供のときから手くせのわるいのがあるとか、片輪な身體に生れて不自由をするとか、何の道理も知らぬ子供のうちからいろいろのことで難澁をするのは、即ち前世でつくつた惡因縁の結果となつて現れてゐるのであるから、おれは罪が深いから今更ほとけ

心を出したとて何にもならぬなどといふやうな間違つた考へを起すと、一層深い罪をつくつて、それだけの苦みを來世においてうけなければならないのであるから、そんな自暴自棄の心を起さなければならぬほどの身體であるとしたならば、猶更のことはやく信行の道にはいつて正しい心になることが必要である。

間違つた考へのために一生の苦の生活

間違つた考へのために、何年かの後になつたら樂まうと思つてゐて、ついつい一生涯を苦んで終つてしまふ人が少くない。若いうちはどんなに苦勞をしてもよいから、四十歳位までうんと稼いだなら、相當な金ができる。その金によつて一生涯を樂んで暮らそうなどといふ考へを起すものも少くない。またそういふやうな話しをすれば、誰れでも良い考へだと贊成するものであるが、

樂みを明かにす

これはとんでもない間違ひである。半生を苦んでくらしたものが中途から俄かに樂んでくらせるものかくらせないものであるかは落付いて考へてみればすぐ分ることなのである。つまりかういふ考へを起すといふのは、樂みといふものの解釋を誤つてゐるのである。樂みは食ふとか飲むとか寢るとかいふことばかりではない歩るくのも樂み、座るのも樂み、働くのも樂みなのである。ところが肝心なこころがけが誤つてゐると、食ふのも飲むのも寢るのも歩くのも座るのも働くのも、みんな苦みと變じてしまふのである。つまり商賣をするにしても、お客樣によい品物を賣ることを心掛けると共に、よい氣分を賣るやうにすれば、商ひも樂みなものであり、金を儲けても樂しいが、心がけが違つて、無理な金儲

苦も樂も心次第

正しき行ひから樂みを生ず。

けをしたくなると商賣をするのも苦しくなつてくる。安い品物を高い品物にみせかけて賣るのも苦勞であり。安物を賣付けて得たのでは、樂みをするどころではなくその結果は苦みをするやうなことになつてしまふのである。これと同じことであつて、食ふても飲んでも飲食するときの精神や身體の狀態によつては、苦みとなるばかりでなく、場合によれば醫者の厄介になるやうなこともできる。男女の間がらでも同じことであつて、よい妻を得て幸福を得るものもあれば、女のために身を誤つて一生を苦んで終るものも少くないやうなもので、樂みを得るか、苦みを得るか、どちらの結果を得るのも物事そのものではないので己の精神が正しいか、正しくないかといふことによつて樂みともなれば、苦みとも

若いうちから樂みをせよ

なるのである。そこで若いうちに樂みを得られるやうな精神を持つてゐるなら、年とつてのちも安樂である、若いうちに苦むやうな心掛けなら、年とつても樂みの得られるやうな狀態になり得るものでないといふこともよく分つてくるのであつて、若いうちに苦んで金ためておいて年とつて安樂するなどといふ人に對してはそれは全然間違つてゐるといひ得るばかりでなく、そういふ考への出るといふことは、邪心にとらはれてゐる結果なのであるからまことに氣の毒千萬な人なのであります。そこで苦んで働らき、苦んで金を儲けるといふやうな邪心があつては、一生涯苦い生活をせねばなりませんから、そんな邪心を少しも早く取除いて、若いうちから樂んで働らき、樂んで金を儲けて國家社會のために

充分に盡して、年をとつても安樂にくらせるやうに邪心をとることを心掛けたいものと思ひます。

ついては、これらの道理がよくお分りになつて日本題目會の教へに基いて、信行によつて邪心をとり除き、樂い人生、幸福な生活をしたいといふ方のための道案内をお話し致ます。

これからいよいよ、御めいめいが困つておいてになるところの邪念をとり除くことのできる、日本題目會で實地に行つてゐる方法についてお話し致しませう。

併し詳く述べますと到底一冊や二冊の本では説明をしつくせませんから、皆さん方にお分りになる範圍において要領をざつとお話しいたしませう。

自己改造の急務

邪念をとり除くこと、卽ち自己改造といふことは、學者達がしきりに叫んでゐる。東京市長後藤新平氏も今日の時代は自己改造が急務であるとしきりに自己改造の宣傳をやつてゐられるが、實際自己改造といふことは大切なことなのであつて、今日の時代ばかりでなく、いつの時代にも自己改造といふことが必要なのであるが、今は困つてゐる人が多く苦み方が深いだけに自己改造が急務なのである。さて自己改造の急務といふことはしきりに叫ばれてゐるが、多くの人々はどういふ考へをもつてゐるかといふと、人にいはれるまでもなく自己改造の必要といふことは、めいめいがすでに承知してゐるのである。承知をしてゐるとともに、自己を改造すべくいろいろとその方法については、少からぬ思ひをい

たしてゐるのであるが、なかなか自己改造といふことは容易ならぬものとみえて、自己改造をせい、致しませうといふてちよつくらちよつと改造のできるものではないのである。自己改造の急務といふことは誰れしも知つてゐるのであるけれども、自己改造ができないために困つてゐるのであるから『自己改造が急務』などといふことを叫ぶよりは『いかにして改造すべきか』又は『この方法によつて自己改造をせよ』と叫ぶことが急務なのである。

しかし後藤新平市長にせよ誰れにせよ、この法なら確かに自己改造ができる。かういふ方法ならば判ておした如く間違ひなくぴたりと自己改造ができるといふ方法を知らないのである。それを知つてゐるのは我が日本題目會のみなのである。

いかにして改造すべきか問題

自己改造法を知るものは日本題目會のみ

誰れにしても、大酒を飲むのはわるい。だらしなく酒のむのはわるい。女に迷つて財産をつぶすのはわるい。親を困らせるのはわるい。妻子を泣かせるのはわるい。人をだますのはわるい。むやみと腹を立てるのはわるい。そういふわるいことをしたくないよしたい。よい人になつてよいことをしたい。毎日愉快に面白くくらしたいぐらひのことは、百も承知二百も合點なのではあるがいくらよくならうといふ心があつても、また惡い心もでてきて働くものだから、これはいけないと承知しながらに、わるい方へ、わるい方へとすゝんで行くのである。

中には修養書でも讀んだら、よくなれることかと思ふて、修養書に親む人も少くない。しかし修養書をみたとて、己の心が入れし

承知しながら邪道へ入る

修養書を讀むだけでは効がない

効果を見られぬ修養法

換はるものでないことは分りきつた事である。最早修養書に書いてある位ゐの事は誰れしも知つてゐるのである。即ち親は大切なものであるから孝行をせよとか、大酒をのむのはわるいからよせといふやうなことを書いてあるだけのことだから、嘘は書いてない、なるほど尤もな次第であると感服するのみであつて、それ以外に何の効果はない。わるい事をさせる己の心は依然として前の通りであつて少しも直つてはゐない。また本を讀んで大酒のむ癖がやみ、親不孝が親孝行にかわるやうならば天下太平世の中に心配はなくなつてしまふわけである。

これらの理窟のわかつた人人が何か修行をやつてみやうといふので、靜座法だとか、陶宮術だとか、座禪だとか、いろいろと首

佛様が明かにしてある

有害無益の僧侶

を突つ込んでやつてみるのであるが、さていよいよ實地にやつてみると能書ほどの効能がない。折角やつてみても遂には不結果に終るといふ落ちになるのである。

學者や教育家やその外多くの人人が、いかに方法をつくしても思ふやうにならないで困つてゐるところの自己改造といふことについては、佛様がちやんと、思ふやうになる方法を明かにしておいて下さつてあるのであるが、それを明かにする役目をもつてゐる僧侶達が、偉そうな顔をしてゐるばかりで肝心要めの役をつとめないから、そこで今日の多くの人人が苦みもがくといふ氣の毒千萬な狀態に陥つてゐるのである。

そして、これらの事は今更こと新しくのべるわけではないので

四つの金言

今日は眞實の時代

今から七百餘年前に日蓮上人が大音聲を發して、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊といふ四つの格言によつて、世の中の人をいましめたのである。

それは佛樣の敎へに基いて方便の敎へを捨てて、眞實の敎へによる修行をして自己改造をしなければならない時代となつたのだから、早く佛樣の敎へに從つて自己改造をしなさいといふて、釋尊の敎へを天下に明かにしたのである。それを、因緣に捉はれて居る心のよこしまな僧侶達は、正しい敎へについて己の本務であるところの自己改造のために、つくさないで、年忌だとか、葬式だとか、そんな事を眞の役目と心得てゐたために、かういふ坊主どもが世の中に在つたのでは、世間の人々に敎へが誤つて傳へられ

日蓮上人の大音聲

有害無益の坊主を燒き殺せ

ることとなつてしまふ、從つて世間の人が迷信に陷つて苦みもがかなければならない。その結果は少しものの譯の分つた人には佛敎といふものは、實際の役に立たないものであるとして、世間の人に忘れられてしまふやうなこととなるから、方便の敎へを信じてゐる坊主ほど世の中の害になる恐ろしいことはないといふところから、日蓮上人が、その時代の執權職であつた北條時宗に對談のとき、日蓮上人が一世一代の大音聲を發して『いくら說いてきかしても、正しき道にはいらない、かういふ惡坊主どもを殘らず燒殺してしまへ』と怒鳴つたところ、その聲に驚いて時宗をはじめとして、並んでゐた大名、小名が縮みあがつたそうてある。この時に時宗が日蓮上人の仰せになつた言葉を用ゐて、わる坊主ど

日蓮の名を賣物にする佛教家

もを燒殺してしまつて、正しい僧をもちひ、正しい修行をするやうにしたならば、今日の人々が今日のやうに苦むこともなくて、多くの人々が一同に身體を健かで心も愉快に、世の中を樂んでくらせるのであつたが、時宗に勇氣がなくて、何等策のほどこすことがなかつたために、今日のやうな狀態に立ち至つた次第なのである。近頃は日蓮上人の敎へが何うであるとか、日蓮主義であるとか、法華宗は何うであるとかいふてゐるけれども、たとへ法華宗の方に屬しておつても敎への通りに實行してゐなかつたり、たまたま譯のわかつた者であつても徒らに研究だとか何んだとかいふてゐて、理窟をいふてゐるのみであつて、日蓮上人が御目的と遊ばしておゐでになるところの自己改造のできる敎へを實地にや

日蓮上人の名言

つてゐるものは殆んどないといふのは、實になさけない有樣である。それを日蓮上人は松野殿に送られた御書のうちに明かになさつてあります。

適ま出家せる者も佛法を學し、謗法の者を責めずして徒らに遊戯雜談のみして明し暮さん者は、法師の皮を着たる畜生也

法師の名を借りて世を渡り身を養ふと雖も、法師となる義は一もなし、法師と云ふ名字をぬすめる盜人也、恥づべし恐るべし。云々。

と仰せられてゐます。これはとりもなほさず今の坊主たちが、研究だとか、御經文の文字の解釋だとか、佛法を學ぶもののやうに心得てゐて、肝心要めの僧の務め即ち僧自身も信行によつて自

眞の教へとは何ぞ

己改造をなし、一般の人人にも信行によつて自己改造に導かずして、法師の體裁をつくつて衣食をむさぼつてゐるもののことを仰せられたのであります。それでは佛樣の正しい敎へ、即ち自己改造法は如何なるものであるかといふと、

一切經のなかの眼目たる法華經において明かに證明されたところの妙法五字即ち御題目を口唱することによつて自己改造即ち身心の洗濯ができるのである。

と明言されてゐます。かういふと世間の人は、それだけの事で果して自己改造ができるものであらうかと思はれるかもしれないが、それは本會において立派に證據立ててゐるのである。實際に行つてゐないものは、それほどに思はないかも知れないが、その

目前に證明してゐる

命を投げ出して努力せるを思へ

御利生の明かであり尊いものであることは、到底一朝一夕にはのべつくせないのである。また幾日かかつたとて話しを聞くとか、本を讀むといふことでは味ひの分るやうにはできないのである。それはその筈である。何故といへば我が日本題目會が多くの世間の人に對して、かういふふうに立派に明言するまでには永いあいだ實地に行つて、幾多の實驗を重ねて御利生を頂いた結果であり また七百餘年前には、日蓮上人が自己改造の急務なることをお悟りになつて、一般の人々が一日も早く御題目を口唱して自己改造をなし、立派な日本國民となつて天賦の方針を全うしなければならぬと叫ばれたために、わるい邪法師どもが讒言をした結果、日蓮上人が首をとられそうになつたり、島流しにされて、命をすて

研究家の大馬鹿

る覺悟になつてまでもおひろめになつたほどの御題目であり、そのまた二千二百餘年前には釋尊が難行苦行をなさつて、一生かかつて御說きになつたほどの御題目であつて、その味ひの計り知られない結構なものであるのだから、研究するなどといふことは、丁度竿の先で月をつつきおとそうとしたり、弓矢をもつて太陽を射やうとするのと同じやうな馬鹿げたことであるといふことがいへるのである。かりに日常ささいなことであつても西洋料理を喰べないものには西洋料理の味ひは話しだけでは分らない。またゴムを見たことのない人にゴムといふものはと說明したところで、實際のことは分らないやうなものである。

本當に御題目の味ひが分つたなら、なんだかんだといふて悠長

體驗の發表なり

一時も早く來れ

な講義や研究をしてゐられるものではない。一日も早く一時も多く自己改造をしたいといふ心になつて信仰をするやうになるものなのである。これらの事については、實に數多い實驗者と、長い間の實行によつて御題目の有がたいこと、即ち自己改造が立派にできること、自己改造の結果仕事も面白く、一家のこらずがニコニコとして愉快にくらすことができることを事實にみて、その味ひを深く深くなめてみた次第でありますから、讀者のお方のうちに實地に行つてよくなりたいと思ふお方は、御遠慮なく日本題目會におゐて下さい、喜んで迎へます。なほまたお分りにならない事がありましたらばできる限りお分りになるやう說明してあげますから、お尋ね下さつて一時も早く正信につき自己の本性をあら

はして、教育家は教育家、醫師は醫師として各自何職業によらず天職を全うして國家のため社會のためにつくして頂き度う存じます。道場は

東京市外戸塚町諏訪百十五番地戸山の原土手の傍

（市電は早稲田車庫前。院線は高田馬場御降車）

日本題目會

本書發行所へ御用の方は市電早稲田車庫前下車南へ二町餘です

題字の說明

頭かたく、胸ひろく、腹ふとく

頭かたく とは善いことを善いとし、惡いことは惡いとしてあくまでも正しい道理をまげぬことである。頭が柔かいと折角立派な考へをもつてゐても自身の薄志からよい考へをすてゝしまふたり、いろいろの故障や苦情からわるいと知りつつよくない方に傾いてしまふことになる。頭かたくしてよいことを善いとするには容易ならぬ努力の伴ふことが多いのであるが後になつてみれば非常に結構な狀態をみることができて幸福を得られるのである。昔しから偉人とか成功者とかいはれた人は頭のかたい人であつたのである。それだから頭かたくといふ事は非常に大切なことなのである。

胸ひろく

とは人の言葉や人の行ひを氣にかけて心を惱まさぬやうに胸をひろくもつ事である。胸がせまいと始終感情の衝突をして自分も氣をわるくし相手にも氣をわるくさせて不愉快な生活を續ければならない。何か事件のあつた場合に、胸のせまい人ならばいさかひをしたり氣を揉んだり神經をいらいらさせて、不愉快な心に捉はれてしまふやうな場合に當つても、胸ひろければ神經をいらだたせるやうなこともなく、その事がらに捉はれることもないから事件に對する判斷もよくついてよいことは一層よく運び、悪いことでも、かうすればよくなるといふ方に考へがついて、よいこともわるいことも一から十までよい方に解決をつけることができて、ニコニコになれるのであるから胸ひろくといふ事は最も大切なことである。

腹ふとく

とは山がくづれてきてもビクともせぬほどのおちつきあることをいふのである。胸がひろくて一から十までニコニコに解決するだけのよい考へがあつても、頭がかたくて正しいことをあくまで正しいとし、考へを曲げないことができても

いよいよ事を運ぶといふ段取になつて、そこに邪魔がはいるとか反對者ができるとかといふ困難が伴つてくると、腹の小さい者ではその困難をつききつて物事を遂行するだけの實行力が乏しいから折角の良案も成就しないことになつてしまふのであるから、腹ふとくといふ事は何事をやるにも成功するための必要條件なのである。然し腹ふといだけで頭がかたくなかつたり胸ひろくなかつたりしたものは反つて頭ふとくが悪い方に働いて大悪黨ができるのであるから頭、胸、腹と三拍子揃はなければよいことはできないのである。この三拍子が揃へば人のため世の中のためになる立派な仕事ができ、愉快にくらせるのであるから卷頭の金言を立身成功の秘訣として實行できるやうに心掛けるがよい。

そして、この金言は單に頭の中で考へたといふやうな薄つぺらなものではなくて、これには深い味ひが存してゐるのである。卽ち本書の著者等は信行をせぬ以前には頭も柔かく、胸もせまく、腹も小さかつたのであるが正信正行を實際に行つて

きた結果、頭はかたく胸はひろく腹はふとく身心の改造ができたのであつて、口先や筆先でうまいことをいふたり書いたりするのではなく體驗の結果によるのである。即ち何人でも信行さへすれば、この三つの德を得られることを實驗によつて證明したのであつてこの事は多くの會員も實行によつてその事實を證據立ててることなのであります。

大音聲終

大音聲　定價壹圓五拾錢

大正十一年五月一日印刷
大正十一年六月一日發行

著者　金子正運　東京府豐多摩郡戸塚町諏訪一一五
著者兼發行者　宇野共次　東京府豐多摩郡戸塚町下戸塚三
印刷者　白井赫太郎　東京市神田區美土代町一ノ二一

發行所　東京市牛込區早稲田中學隣　春水社　振替口座東京三九六三四番

□著作權所有□

不健全な書物は惡思想を作る

注意すべき青年の讀み物

「日本青年」社長　宇野共次

子供から大人になるまでには、以前には一定の階段があつた。假へば雜誌など讀むにしても、少年時代にはお伽噺のやうなものを基準としたもので美しく育てられ、青年時代になると、修養を骨子としたものによつて鍛えられ、それから成人すると、一般社會的のものにはいるといふ狀態であつた。ところが今日の有樣を見ると、お伽噺時代から、すぐ新しい小說物に移るといふふうで、その中間の修養時代が缺けてゐる、と大町桂月先生が話されたが尤も至極な觀察である。實際に世間で立派な仕事をやつてゐる人物を見ると、青年時代から修養を怠らなかつた人であるのである。私は前前はヒョロヒョロした精神と肉體の所有者であつたが、修養のおかげで人間の仲間入ができるやうになつたのである。その體驗による修養方法を『日本青年』に掲げてゐます。桂月先生及び其の他諸先生も熱心に盡くされてゐます。青年の必ず讀むべき雜誌。雜誌見本御希望者は三錢切手十枚御送附あれば、直ちに送本いたします。

日本青年（毎月一回一日發行）
定價一冊三十錢　送料一錢
三ヶ月分（三冊）送料共金九十錢
半年分（六冊）送料共金一圓七十錢
一年分（十二冊）送料共金三圓三十錢
東京市牛込區早稻田大學前
日本青年社
振替口座東京四一七一二番

手紙研究會
春水社

出版圖書一覽

讀んで直ぐ役に立つ **手紙の書き方** 定價壹圓 送料八錢

作り方と習字 **女子新手紙文** 定價壹圓卅錢 送料八錢

少年少女 **面白い手紙文** 定價五拾錢 送料四錢

大正 **青年手紙文選** 定價五拾錢 送料四錢

活きて働らく **集金手紙** 特價參圓 送料拾錢

習字兼用 **草書手紙文** 定價參拾五錢 送料四錢

新式活用 **手紙文用語便覽** 定價參拾五錢 送料四錢

趣味文の模範 **俳人の手紙** 定價八拾五錢 送料六錢

小學中程度 **作文自習書** 定價四拾錢 送料四錢

珍柚 **俳句歲事記** 定價壹圓廿錢 送料六錢

大正 **最新一萬句選** 定價壹圓卅錢 送料六錢

俳句とその作り方 定價七拾錢 送料六錢

俳句の解し方 定價壹圓拾錢 送料六錢

辭典兼用 **字くづし便覽** 定價八拾五錢 送料八錢

573
79

終